美しい音楽が、聞こえてきました。それは、あまりにも耳にあまいひびきでしたので、これは王宮の楽だんが、通りかかったのに違いないと、大男は思いました。実は、小さなベニヒワがまどの外で歌っていただけなのですが、庭で、鳥がさえずるのを、大男が耳にしなくなってから、あまりにも長い時間が、すぎたので、大男の耳には、鳥の声が、世界で最も美しい音楽のように、聞こえたのです。やがて、雲は、頭上でおどるのをやめ、北風も、ほえるのをやめま

した。そして、開いたまどからかぐわしいかおりが、大男の方にやってきました。「やっと、春が来たのに違いない」と、大男は言いました。そして、ベッドから飛び起きて、外を見ました。何が見えたでしょうか。最高にすばらしいながめでした。子どもたちが、かべの小さなあなを通りぬけて入りこみ、木のえだの上に、すわっているのでした。それぞれの木に、小さな子どもが乗っているのが、見えました。木々は、子どもたちがもどってきたので大喜びで、自

分の体を、おおいつくすほど、花をさかせ、子どもたちの頭の上で、やさしくうでをふっておりました。鳥たちはとびかい、喜びにさえずり、花は緑の草むらから頭を出して、笑っておりました。それは、うるわしいじょうけいでした。ただし、どういうわけか、太陽はてっていませんでした。しかし、大男はそれをふしぎには、思いませんでした。なぜなら、子どもたちの中に、大すきなあの子ども